

第32回練馬区新人演奏会出演者インタビュー

【金管楽器部門優秀賞】 佐藤采香(さとうあやか)さん



今年の5月27日、6月24日に行われた第32回練馬区新人演奏会出演者選考オーディションで金管楽器部門優秀賞を受賞した佐藤采香さんにユーフォニアムとの出会いから練馬区新人演奏会への思いをお聞きしました。佐藤さんは現在、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程に在学中です。

—ユーフォニアムとの出会いは？

小学校3年生の時、学校の金管バンドクラブで、先生に勧められて始めました。

—ユーフォニアムの魅力を教えてください。

音を出した時に、すごくいい音で、音が見えるというか…、例えると「暗闇に灯っている明り」をイメージさせる音だなと思いました。その音に魅せられて、演奏する時はいつも、音の明りを美しい明りにしたいと思ってやっています。

—最初に音を出した時、自分の中に「暗闇に灯っている明り」というイメージが湧いたのですか？

そうですね。その印象は今も変わっていません。一般的に言う「音の芯」が私には「暗闇に灯っている明り」の中心の一番明るい部分に感じます。

帰宅途中にある民家の玄関先の外灯が黄色がかかった色の明りで、それが「ぽっ」と灯り、中心部が明るく光り、周辺をほのかに照らしている様子を見た時、「ああ、ユーフォニアムの音はこの明りだ」と思ったことがあります。ユーフォニアムの音は、とても心が穏やかになります。

また、ユーフォニアムの音は、響きがとてもよくて、コンサートホールの中に音が響き渡りますし、いろいろな楽器とも相性がよくて、全体を包み込む大きな存在だと思います。

—音色の他にユーフォニアムの魅力はありますか？

他の楽器に比べて知られていないという点です。今回のユーフォニアム協奏曲は、オーケストラの方々もなかなか演奏する機会がない曲だと思います。お客様もユーフォニアムの曲を初めてお聴きになる方がいらっしゃると思うので、ユーフォニアム奏者としては、このような機会をいただけてうれしいです。演奏を聴いてもらい、魅力を知ってもらおうというか、私がお客様とユーフォニアムの初めての出会いの役割を担うことにやりがいを感じています。私にとって、「ユーフォニアムは知られていない楽器」というところがすごく魅力的です。

—お話しを伺いながら、ユーフォニアムの音がとても聴いてみたくなりました。やはり、一般的にユーフォニアムの音を聴く機会は少ないように思います。今回の演奏会でユーフォニアムの音を聴ける機会があることをうれしく思います。

では、この第32回練馬区新人演奏会出演者選考オーディションを受けるきっかけは？

東京フィルハーモニー交響楽団と演奏したかったからです。

—オーディションの情報はどのように知りましたか？

学校でチラシが掲示されていたのを見ましたし、また、先生からも紹介がありました。当初、オーディションの日にオーケストラの仕事が入っていて、都合が悪かったのですが、たまたま予定が変わったので、「絶対に受けよう！」と思い、応募しました。

—今回は、応募資格を区外の方へ広げて初めての金管楽器部門のオーディションでした。参加者数55名で入賞されたのが佐藤さんです。オーディションに参加された感想は？

今、大学院生なので、試験というものから離れていて、コンクールも2年前に受けたきりでした。審査員がいらっしゃる環境で演奏するのは久しぶりで、いろいろなプレッシャーを感じていたこともあり、ものすごく怖かったです。

—第32回新人演奏会の演奏曲にホロヴィッツのユーフォニアム協奏曲を選ばれています。なぜ、この曲を選びましたか？

高校2年生の時、このユーフォニアム協奏曲の第1楽章を演奏しました。その時のレッスンがものすごく厳しかったことを覚えています。先生は、「音楽はメッセージ」、「お客様にメッセージが届かないと演奏する意味がない」とおっしゃって、レッスンは始まると2小節くらいしか演奏させてもらえませんでした。2小節演奏すると、先生が「僕のところに全然届いてこない」とおっしゃって、50分のレ

ッスンで45分くらいずっとその繰り返しで、泣きたい気持ちでした。もう、チャイムが鳴るという時、心を込めるどころではなく、全身全霊、魂も込めて、全てを入れて演奏したら、先生が「それだよ」と言ってくれました。そこで、考え方が変わりました。先生が「演奏することは容易いことではない」ということを教えてくれた時に演奏していたのが、このユーフォニアム協奏曲でした。ここから、いろいろなものが自分の中で始まったというか、開かれていきました。

—このユーフォニアム協奏曲は佐藤さんの転機になった曲だったのですね。

そうですね。

—高校2年生の時、自分は音楽の世界でやっていくというイメージはありましたか？

ありました。日本一になりたいと思っていました。

—高校2年生以降、このユーフォニアム協奏曲に思い出はありますか？

この曲は、私の大事な節目、節目を握っている曲です。

大学2年生の時、日本と海外の国際コンクールを受けましたが、両方とも一次審査の課題曲がこの曲でした。両方のコンクールに対して、「二次審査まではいけるのではないか…」と安易に考えていました。結果は両方とも一次審査で落ちてしまいました。国際コンクールの一次審査の時、「あ、この人1位だ」と思った人が案の定1位でした。他の参加者とは差が付きすぎていて、「ああ、これが世界レベルなんだ」と感じました。

また、この曲は、大学院1年生の時に受けたコンクールの本選の課題曲でした。課題曲が発表された時、何が何でも絶対に1位を取ろうと思い、そこに向けて頑張りました。そして1位を頂くことができました。

—今回の新人演奏会の演奏曲に節目、節目となったユーフォニアム協奏曲を選ばれたということで、今一番素晴らしい演奏をしていただけたと思います。演奏会への意気込みをお願いします。

私自身、この曲と一緒に歩んでいます。今できる演奏は、やはり高校2年生の時とは全然違うし、大学2年生の時とも大学院1年生の時ともぜんぜん違います。いろいろな事を考え、経験して今の演奏があると思いますので、全身全霊をかけて演奏をします。お客様との出会いもまた私にとっての節目になると思います。

また、馴染みのないユーフォニアムの音を聴いて感じて覚えて帰っていただけたらうれしいです。

—演奏会が終わった後、自分にご褒美をあげるとしたら、どんなご褒美ですか？

焼肉、ラーメン、カレー、うどん…食べたいです。

—好きな演奏家または好きな曲等を教えてください。

好きな演奏家はたくさんいますが、ピアニストの内田光子さんで、特にモーツァルトのピアノコンチェルトが好きです。いつも元気をもらっています。

—どんな演奏家になりたいですか？

いっぱいあるのですが、世界一のユーフォニアム奏者になりたいです。人に夢や希望を与えられる音楽家、本物の音楽家というか、子供の夢みたいですが巨匠になりたいです。

—今回練馬区の新人演奏会ということで、「練馬」と聞いて思い浮べるものを教えてください。

大学生の時に上石神井に住んでいたことがあります。上石神井はとってもいいところで、大好きでした。学校に行くには遠かったのですが、楽しい学生生活を過ごした、思い出のある場所です。

—では最後に、今回のインタビューをご覧になった方へのメッセージをお願いします。

ユーフォニアムがオーケストラの曲の中で登場することは稀ですが、オーケストラの音色と合わさるユーフォニアムの音色がとても好きです。心を込めて精一杯演奏致します。

<インタビューを終えて>

ユーフォニアムの音色の素晴らしさを一人でも多くの方に届けたい、そんな想いのあふれるインタビューでした。佐藤さんは、ユーフォニアムの練習をする時、漠然と今自分が見えている世界は狭くて、もっともっと自分の知らない世界で修業したいと思っているということでした。お話を伺いながら、今後、しなやかにどんどん伸びていく演奏家という印象を持ちました。